

平成11年度イセエビ放流技術開発事業（抄録）

吉見圭一郎・團 昭紀

将来的なイセエビ人工種苗の放流に備えるために、平成7～11年度の5カ年にかけて、イセエビ放流技術開発事業を実施したので、その概要を報告する。なお、最終年度に該当する本年度は、過年度の総合報告となるので、詳細については、各年度の事業報告書を参照されたい。

I. フィロソーマ幼生に関する調査

1995～1999年にかけて、海部郡沿岸～沖合域において、プランクトンネットによる採集調査をおこなった結果、イセエビ科幼生43個体、様々なサイズのセミエビ科幼生139個体を採集できた。ウチワエビ、セミエビの漁獲量がイセエビと比較して著しく低いことから、それぞれの分布域が異なる可能性が示唆された。

II. プエルルス幼生に関する調査

1. 採集調査 1995～1999年にかけて、コレクターによる採集調査をおこなった結果、プエルルス幼生および初期稚エビ371個体を採集できた。採集ピークは7～8月に観察されたが、環境要因と採集数の関連性については、明確な指標を得ることができなかった。
2. 潮流調査 1997～1998年にかけて、ブイを用いた潮流調査をおこなった結果、プエルルス幼生の採集定点周辺で潮流の取れんが観察されたが、観察結果を定量的に評価することができなかった。
3. 潜水調査 1995～1999年にかけて、イセエビがよく観察される岩礁域において、SCUBA潜水によるプエルルス幼生の採集調査と周辺状況の観察をおこなった。その結果、プエルルス幼生は3個体のみの

採集に終わったが、幼生が観察された岩礁には、アラメ・カジメなどが繁茂し、その表面には隠れ場となる小孔や間隙が多く観察された。

4. 飼育試験 1997～1999年にかけて、コレクターで採集した稚エビを4種の餌料を用いて飼育した。その結果、ムラサキイガイで飼育した個体群が最も成長に優れているが、体色が紫がかかる傾向が見られた。次いでオキアミで飼育した個体群の成長がよく、体色もイセエビ特有の赤い体躯になった。配合餌料と魚肉は成長・生残が不良で、体色も灰色がかった。

III. イセエビに関する調査

1. 標識改良試験 1995～2000年にかけて、イセエビ154個体にチューブ型アンカータグを装着し、長期にわたる飼育をおこなった。その結果、従来の標識の耐久性を高めることができた。
2. 胃内容物調査 1995～1999年にかけて、漁獲されたイセエビの胃内容物を調査した結果、量的な把握は困難であったものの、移動性に乏しいベントス群集を餌にしている傾向がうかがえた。
3. 標識放流調査 1995～1997年にかけて、外部標識を施したイセエビを放流し、追跡調査をおこなった結果、短期的な移動が乏しく、岩盤域で集団生活を営んでいることが推察された。
4. 漁獲実態調査 1995～2000年にかけて、イセエビ主要漁獲地区において、水揚げ日誌による漁獲実態調査をおこなった。その結果、9月中旬に解禁された直後から漁獲圧が過度にかかり、水温が低下する冬季には漁獲量が急減することがわかった。